第50回

男性のがん検診受診率向上にむけての取り組み

～「男の健康道場」は男性住民の行動変容に効果をもたらしたのか～

島根県・雲南市立病院地域医療部保健推進課
保健師　**渡部初枝**

当院の紹介

当院は島根県東部にある中山間地の雲南市（人口３万7,000人）に開設され、地域中核病院としての２次医療機能を担う診療科15科、病床数281床を有するケアミックス型の公立病院である。『地域に親しまれ、信頼され、愛される病院～地域と共に地域を支えていく病院～』を基本理念とし、病院ボランティアや病院を支援する会をはじめ、地域住民や行政とともに地域を支えるため一丸となっている。

全国の中山間地域で少子高齢化、人口減少、医療・介護の需要増加、医療職不足といったさまざまな医療・介護・福祉に関する問題に頭を悩ませており、その打開策としての地域包括ケアシステムの構築に奔走している中、当院も雲南圏域の中核医療機関として、行政や住民と連携を図りながら問題解決に向けたさまざまな取り組みを行っている。平成30年度には多くの支援を受けて新病院を竣工したこともあり、地域包括ケアシステムのさらなる充実に、市民や行政から寄せられる期待は大きい（写真１）。

写真１　新しくなった雲南市立病院

住民の要望から生まれた男の健康道場

雲南市では人口減少、過疎化、少子高齢化が進む中、住民が地域でできることは地域で行うといった課題解決型の住民自治を『地域自主組織』として全国に先駆けて実践している。地区ごとに地域づくり・地域福祉・生涯学習の３本柱の分野を中心に、さまざまな活動を展開している。

地域自主組織は現在30地区あり、交流センターを拠点として活動している。その地域自主組織のうち、課題解決に向けてさまざまな活動を活発に行っているＫ地区（人口約630人）から、「うちの地区には病気になる男性が多い」「男性は健康に関する意識が低い」「男性は検診を受けていない人が多い」といった声があがった。実際のデータで見ても雲南市は壮年期男性のがん死亡率が高く、がん検診についても全国的には男性のがん検診受診率は女性より高いのに対して、雲南市においては男性のがん検診受診率が極めて低く、市における健康課題のひとつとして挙げられている。

市は受診率向上にむけたさまざまな対策を講じており、当院においても検診受診機関として積極的に取り組んでいる。Ｋ地区にも以前から保健師等が出向き、住民へのがん検診受診率向上にむけた啓発活動等を行っていたが、男性、とくに壮年期男性の参加は少ないと感じていた。

今回、Ｋ地区の住民からは、「ぜひとも、病院と一緒に男性のための健康教室がしたい！」との依頼もあり、Ｋ地区の代表者と当院の病院長（現病院事業管理者）、看護師、保健師、事務員、市の保健師などが集まり、話し合いを重ねた結果、平成26年度、男性が健康について学ぶ場として『男の健康道場』と名付けた健康教室を開催することとした。以降毎年１回、住民

表　実績

開　催　日	内　容（テーマ）	講　師	参加人数
H27. 3. 19（木） 19：00～21：00	「検診の薦め」、「病院建設」 「健康に過ごすための良い生活」	病院長 病院看護師・保健師	48 人
H27. 11. 6（金） 19：00～21：00	「中高年男性特有の健康問題」 「減塩について」	病院長 病院管理栄養士	47 人
H28. 11. 18（金） 19：00～21：00	「認知症について」 「認知症予防」	病院長 病院看護師・保健師	63 人
H29. 11. 8（水） 19：00～21：00	「がん予防について」 「検診の受け方について」 「K地区の検診受診率について」	病院長 病院保健師 雲南市保健師	65 人
H30. 11. 16（金） 19：00～21：00	「新病院の機能とこれからの地域医療」 「男性によくある病気」 「K地区の検診受診率について」	病院長 病院保健師 雲南市保健師	61 人

と病院、市保健師などとともに開催している。

男の健康道場を企画する上で気をつけたこと

『地域の男性が毎回参加したくなるような、そして健康への関心が高まるような健康教室』をコンセプトとし、以下の点に気をつけた。

1．ねらい（目的）を明確にする

一番のターゲットはこれからのK地区を担っていく壮年期男性とし、男性が健康意識を高めることができ、よい行動変容のきっかけづくりとなり、さらにがん検診の必要性や重要性に気づき、受診につながることをねらいとした。

2．集まりやすい開催時間

一番のターゲットである壮年期男性が集いやすい時間帯として、平日の仕事終わりである夜間帯（19時～21時）を選んだ。

3．参加したくなるようなネーミング・構成・内容

「教室」よりも肩ひじ張ったイメージの「道場」というネーミングとした理由は、あえて「遊び心や興味本位では来ないでほしい」というメッセージ性を持たせることで、男心をくすぐるのではないかと考えたからである。構成は2部構成とし、はじめに講演会を行い、あとで交流会を行った。

講演会の内容は、健康への関心が低い人でも耳を傾けてもらえるよう堅苦しくなく、わかりやすく、楽しく学べるような講義を心がけた。また、男性のがん検診受診率向上をねらい、がん検診に関する話は必ず取り入れた。

交流会は男性が楽しみにして集まってくれるよう、お楽しみ要素を重視し、地元の人たちがつくった地元食材を使った料理や地酒を病院長やスタッフと住民とが飲食しながら、和やかな雰囲気の中で直接対話できるようにした。この交流により病院への理解が深まることや、病院を一層身近に感じてもらい、気軽に医療機関に足を運んでもらえるきっかけになること、病院や市への忌憚のない意見や要望を情報収集できることも重要なねらいである。

4．その他

住民が主体となり、行政、医療機関が一緒に考える。全体の構成や講演のテーマ・内容、講師、交流会の方法等、住民の要望に沿って企画した。また、健康づくり活動の重要性を理解してもらう実践の場として、当院で研修している医学生や研修医、看護学生も必ず参加している。次世代の医療人育成の場としても位置付けている。

男の健康道場の実際

男の健康道場の実績（表）と開催時の様子について写真で紹介する。講師は病院長や看護師、管理栄養士、保健師などの病院職員や市の保健師が担当した。参加者は7割以上が男性で、その他は妻など家族の参加があった。行政や地域の訪問看護師などの参加もあり、交流会では地域の課題に関するさまざまな話が飛び交

写真２　病院長の講義の様子

写真５-１　交流会の様子と地元食材の手料理

写真３　病院保健師の講義の様子

写真５-２　交流会の様子と地元食材の手料理

写真４　男性参加者たちの講義中の様子

い、有意義な会となっていた。参加人数の一番多い時は65人で平均57人であった。年代別では40～60歳代の参加者が７割以上であった。

次に平成30年度に行った男の健康道場の様子を紹介する。住民への周知に関してはＫ地区の代表者等主要メンバーに一任し、全戸に声掛けをした。

○講師および講義内容

一部　講演会（１時間：19時～20時）

・病院長「新病院の機能とこれからの地域医療」（30分　写真２）

・病院保健師「男性によくある病気」（15分　写真３、４）

・雲南市保健師「Ｋ地区の検診受診率について」（15分）

二部　交流会（１時間：20時～21時　写真５-１、５-２）

○参加者の声（アンケートより一部抜粋）

・雲南病院のこれからの医療の方向性がわかってよかった。

・新しい病院のことや医療の現状がわかってよかった。

・健康番組ではよく見ているが、直接聞いて実感が持てた。

・今までで一番参加者が多く、Ｋ地区も健康に関心を持つ人が多くなってきたのだと思う。

・検診の必要性について説明を受けよくわかった。

・雲南市の今後の医療についてよく理解できた。親しく話しあえる場があってよかった。

・一部、二部とも楽しく参加できた。

図１　結果（性別）

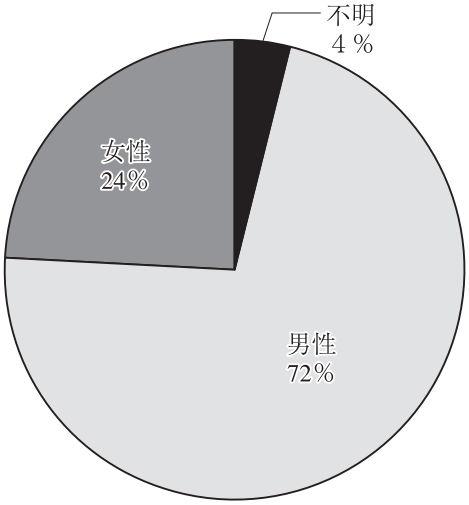


図２　結果（年代別）

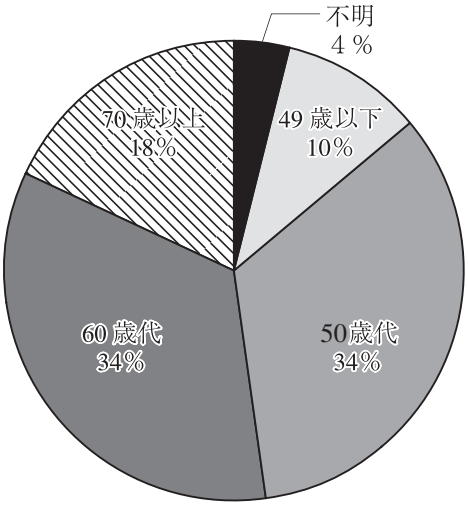


図３　結果（講演会の評価）

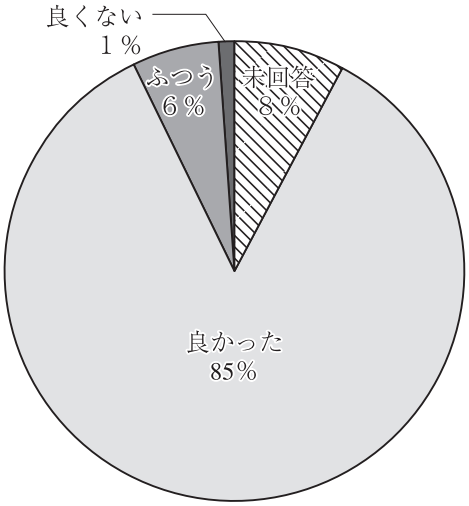
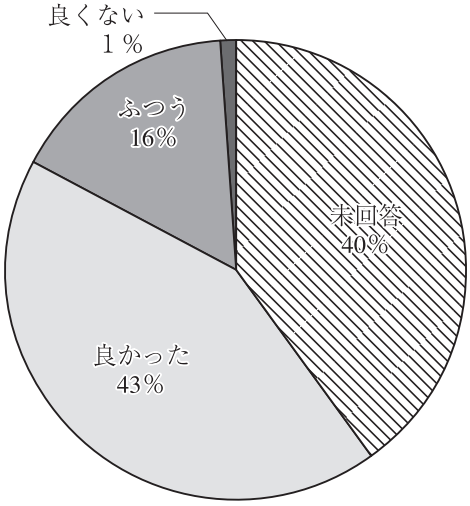


図４　結果（交流会の評価）



男の健康道場は男性の行動変容に効果があったのか？

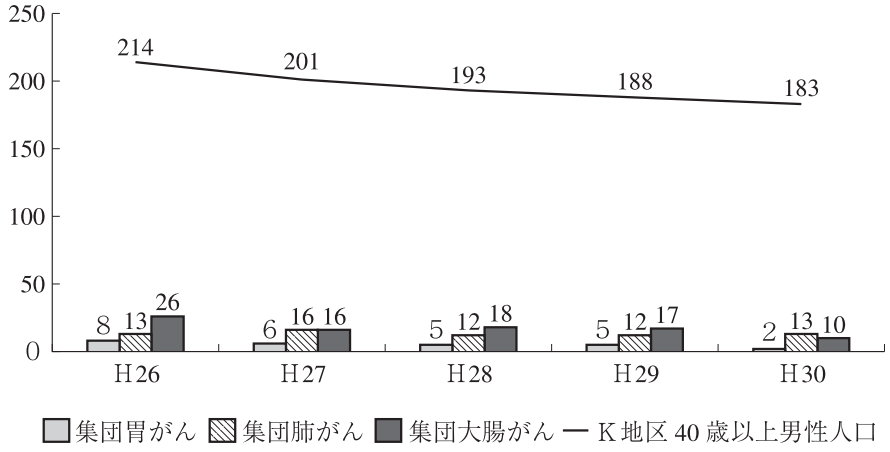
参加した男性が健康意識を高め、行動変容のきっかけとなったのか、ひいてはＫ地区の男性のがん検診受診率が向上したのか、参加者のアンケート結果から得た情報と、雲南市が実施するＫ地区の胃がん、肺がん、大腸がん集団がん検診の受診者数の経年的変化（雲南市統計より）を見た。その結果、以下のとおりであった（図１、２）。

アンケート回収151人、回収率79.9％。性別は男性が７割以上、年代別は40～60歳代が７割以上占めていた。自由記述では以下のような意見や感想があった。

・病気に関することなどさまざまな知識が深まった。
生活習慣の改善に向けて役立った（38件）
・がん検診受診の必要性、重要性に気付いた（12件）
・医療職との交流で病院を身近に感じた（10件）
・交流会の改善を望む（７件）
・Ｋ地区のがん罹患率や検診受診率等に関する状況を知る機会となった（６件）
・家族の健康管理のために役立った（３件）

上記の結果から講演会は８割以上が「よい」と回答し、よい評価が得られた（図３）。自由記述からも健康意識を高めたり、健康への知識を深めたりすることに効果があったといえる。また、市の保健師がＫ地区のがん検診等の受診状況を話したことで、住民にとっ

図５　結果（雲南市が実施するＫ地区の胃がん、肺がん、大腸がん集団がん検診の受診者数の経年的変化（雲南市統計より））



て身近な情報が得られ、自分ごととして考えることができ、がん検診受診の必要性を感じられたようである。

交流会については残念ながら「よい」と回答したのは約４割であった（図４）。自由記載でも交流会の改善を望む意見があり、その要因としては交流会で飲食した食事はＫ地区の住民が事前にすべて手作りしたものであり、やや負担感があったと思われる。このことについては今後検討する必要がある。

しかし、交流会で病院長や保健師、看護師と直接話をしたことで、「検診をすすめてくれたからちょっと行ってみることにした」とか、「前から気にしていた症状があったが怖くて受診できずにいたが、直接話したら行く気になれた」などといったうれしい声を後に耳にした。今後も交流を重ねていくことは必要であると感じた。そして、もっとも気になるのが、『実際にＫ地区の男性のがん検診受診率が向上したのか』、ということであるが、Ｋ地区の40歳以上の男性人口と集団がん検診受診者数の経年的推移を比較してみたところほとんど変化がなく、やや残念な結果であった（図５）。

今後の課題と展望

『男の健康道場』では、がん検診、特定健診や予防接種に関する啓発や予約取り、健康教室の周知などさまざまな活動ができる場としても活用したい。さらに、当院で近年とくに力を入れている在宅医療の普及に向けての理解がより深まるような講義も積極的に取り入れていきたい。また、雲南地域の医療を守る役割の医療機関として、Ｋ地区での取り組みを市内の他地区にも広げ、雲南市の健康課題の解決に向けて力を注いでいきたいと考えている。

考察とまとめ

これまで当院が実施した健康教室では、たとえ男性をターゲットにした健康教室であっても50人以上集まったことはかつて経験がない。この『男の健康道場』においては、毎回50人以上もの男性が集まることに驚いた。Ｋ地区の地域の強い絆や結束力を実感した。残念ながら現時点においてはＫ地区の男性のがん検診受診率の向上については明確な検証はできなかったが、健康道場というコンセプトそのもののはがん死亡率が高く、かつ健康問題に関心の低い「壮年期男性」を引き込む潜在能力を持つと考えられた。

ただし、コロナ禍においては、集会や会食が感染拡大のリスク因子となるなかで、『男の健康道場』にとっては大きな逆風下にあるものの、今後も開催様式や構成、コンテンツ等を工夫して『男の健康道場』を継続し、有用な健康情報を提供することで健康意識を高め、生活習慣の改善等の行動変容やがん検診受診率の向上につながることが期待できると考える。今後も住民や行政とともに評価、修正しながら、より効果的で魅力のある『男の健康道場』にしていきたいと思う。